

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

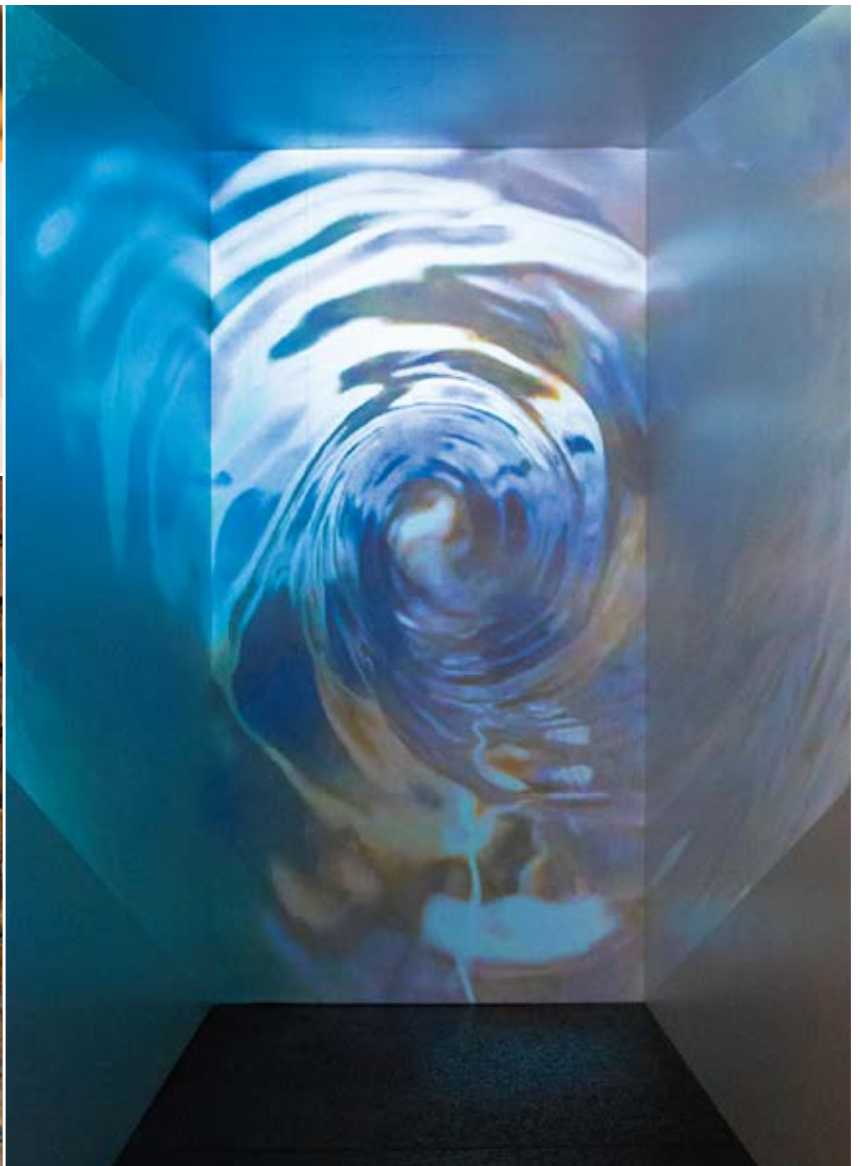


vol. **50** OCT. 2019

特集 百年前の窯の保全 ものづくりの心を未来へ

Historic preservation of a huge 100-year-old kiln

Passing on knowledge and the beauty of crafts to future generations



Historic preservation
of a huge 100-year-old kiln

Passing on
knowledge and the beauty
of crafts
to future generations

特集 百年前の窯の保全

ものづくりの
心を
未来へ

1997年に国登録有形文化財（建造物）に登録された
「窯のある広場 資料館」は、

昭和40年代まで常滑繁栄のシンボルだった
土管工場（1921年建設）を保存公開したものです。

そこに宿る常滑の「ものづくりの心」を

さらに百年の後まで伝えていくため、

調査から5年かけて取り組んだ

保全工事が2019（令和元）年10月に完了しました。

近代常滑の産業を築いた新しい窯

知多半島の豊富な粘土や燃料を活かし、平安末期にはすでにやきものの産地だった常滑。明治になると、近代土管*、焼酎瓶、タイルの生産が始まり、明治末期から大正にかけて、常滑はそれらの生産地として急速に発展していきます。

その背景には、窯の経営者たちが同業組合を結成し、ヨーロッパの最新技術をもとに生み出した「両面焚倒焰式角窯」がありました。登窯と違って平地に築け、石炭で焚く新しい窯です。共同で一つの窯を焼いていた業者はそれぞれ単独の窯を持てるようになり、生産力も競争力も格段に進歩。日本の近代化とともに土管が大量に必要とされるなか（p.05「DATA2」参照）、常滑はやきものの産業の町として新しい段階を迎えます。

両面焚倒焰式角窯には高い煙突が必要でした。モクモクと黒煙を上げる煙突は、近代常滑を象徴する町の風景になっていきます。昭和30年代、市の中心部には400本近くの煙突が林立していました。しかし、昭和40年代になると大気汚染が問題になってきます。燃料が石炭から重油へと切り替わり、また土管の需要も減って、しだいに煙突から煙は上がらなくなりました。「窯のある広場・資料館」の場所にはかつて（併）片岡勝製陶所の工場群がありましたが、1971（昭和46）年に操業を停止します。

*木型を使用した大量生産型の土管からを「近代土管」と呼んでいる。



1.2. 昭和38～39年の常滑の街
（撮影：山田脩二）

3. 黒い外壁と瓦葺の木造建築は、常滑の原風景。内部に大型の土管を焼成する窯を持っています。窯が使われていた当時は、現在の「世界のタイル博物館」あたりに、原料の粘土置き場、原土用ミル・土練機・土管機を備えた建物や作業場など、いくつもの関連工場が建っていました。

DATA 1 「窯のある広場・資料館」の歴史

1921年(大正10)	土管工場(現「窯のある広場・資料館」) 建設、操業開始
1971年(昭和46)	操業終了
1985年	文化スクエア構想が始まる。 土管工場(窯・煙突・建屋)の保存へ
1986年	一般公開開始
1997年(平成9)	国登録有形文化財(建造物)に登録
2007年	経済産業省「近代化産業遺産」認定 開館10周年を迎え館内をリニューアル
2016年	12月 保全工事のため一時閉館
2019年(令和元)	10月 保全工事終了、一般公開

ミュージアム構想「この地をやきものの文化ゾーンに」

煉瓦で築かれた角窯は、当時の痕跡をそのままに美しく残っていました。そして、多くの人が働いて大量の製品を作っていた近代常滑のエネルギー、ものづくりの熱や工夫、技術など、その時代の人々の力強い営みを語っていました。

「だから、たくさんの人が、この窯を大事にしていきたいという気持ちを持ったのではないですか」と、尾之内明美館長。そして、「この地をやきものの文化ゾーンに」というミュージアム構想が動き始めたのです。

窯、建物、煙突を整備し、㈱INAXへの社名変更1周年の記念事業として一般公開を開始したのが1986年。1997年には、その窯・建物と煙突が国登録有形文化財(建造物)に登録。そして2016年、貴重な文化財として、保全工事が始まりました。

新たにスタートするミュージアム

老朽化による不具合が目立ってきた2015年に調査を開始。すると、長年見てきたはずの窯なのに、初めて知る事柄がいくつも出てきました。また、最初に公開をめざした先輩たちの「ものづくりの心を未来に伝える」という強い思いも伝わってきました。

この窯で働いた人たちは、成形・乾燥させた重い土管を運び入れて積み上げ、15日間かけて焼き上げました。焼成時間は70～90時間。両側に7つつある焚き口から順次、最初は30分間隔、終盤には15分間隔で、炎の色を見ながら石炭を投入し続けました。

そうした実際のものづくりが体感できるように、この窯をそのまま見せる——それが、今回の保全工事のコンセプトになりました。(登録文化財を「当時の姿のまま見せる」という難しさは、その後、実感することになるのですが。)

「ミュージアムの始まりであり中心施設であるこの窯が、今回の保存工事で全く新しくなった。それは、ミュージアムが次の時代に向けて新たにスタートすることにつながりました」と、尾之内館長は話します。



シンボルとしての 塔「煙突」

100年後も往時の姿であるために

使われなくなった煙突や窯は劣化が加速します。倒壊が心配されて取り壊され、街の風景は大きく変わっていくなか、煙突の保全工事の方針が、「100年後の人たちにも、常滑の近代産業を伝えるシンボルとして遺す」と決まりました。

そのためには、高さ22mの煙突の現在の姿を変えないで、耐震補強をする必要があります。そこで、①煙突表面の煉瓦にそれぞれ番号をつけた上で解体・保管し、②コンクリートの基礎の上にRC造による煙突の躯体をつくる ③その表面に、保管・洗浄した煉瓦を以前と同じ場所に施工する、ことにしました。2017年5月中旬、煙突の工事が始まりました。煙突の高さは日に日に低くなり、ついに8月に無くなって、ちょっと寂しいミュージアムになりました。

工事の過程でわかったこと

工事の過程でわかったことがいくつかありました。

まず地盤。実は、窯の下には水脈があり地盤が軟弱だという調査結果があったのです。ところが実際は、「地盤の固い粘土の上に、窯も煙突もつくられていました。しかも、粘土の搬入、成形、乾燥、窯入れ、すぐに出荷という効率の良い配置計画。安全を見ながら、適切につくられていました」と、実施設計を担当した日置拓人さんは言います。

煉瓦の積み方からも常滑の歴史が実証されました。「『この部分だけ、明らかに素人の手ですね』と煉瓦積職人が言って」と、話すのは主任学芸員の後藤泰男。「戦時中の東南海地震で煙突が崩れたという話はありませんが、記録はなかった。この煙突の煉瓦は、必要に迫られて素人が補修した証拠です」。戦時中も、常滑の煙突は煙を上げ続けていたのです。

10月下旬、再び煙突が立ち上がり、もとあった場所に煉瓦が張り戻されます。事前調査で見つかったクラックも忠実に再現して、12月末に工事が完了しました。

炎の吸い込みを良くするため、高い煙突と窯の煙道がつながっています。空気が流れて、窯内の換気にも一役買っています。煙突の煉瓦の数は約3万個です。



DATA 2 日本の近代化を支えた土管

外国人居留地の下水道整備に

幕末から明治にかけて建設された神戸と横浜の外国人居留地には、土管を使った下水道が整備されました。この時に採用されたのは、常滑の陶祖・鯉江方寿が考案した真焼土管でした。

水路をさえぎらず線路を敷設

1872(明治5)年に日本で初めて開通した鉄道。田畑の水路をさえぎらないように、土管の上に土や桐木を盛り上げた「道床」に線路を敷設しました。ここでも常滑の真焼土管が使われました。

田畑を改良し食糧増産に貢献

昭和の初め頃から、水田を改良したり、湿地を畑にしたりする際には、土管を使った「暗渠排水」という土壌改良が行われ、食糧増産に貢献しました。

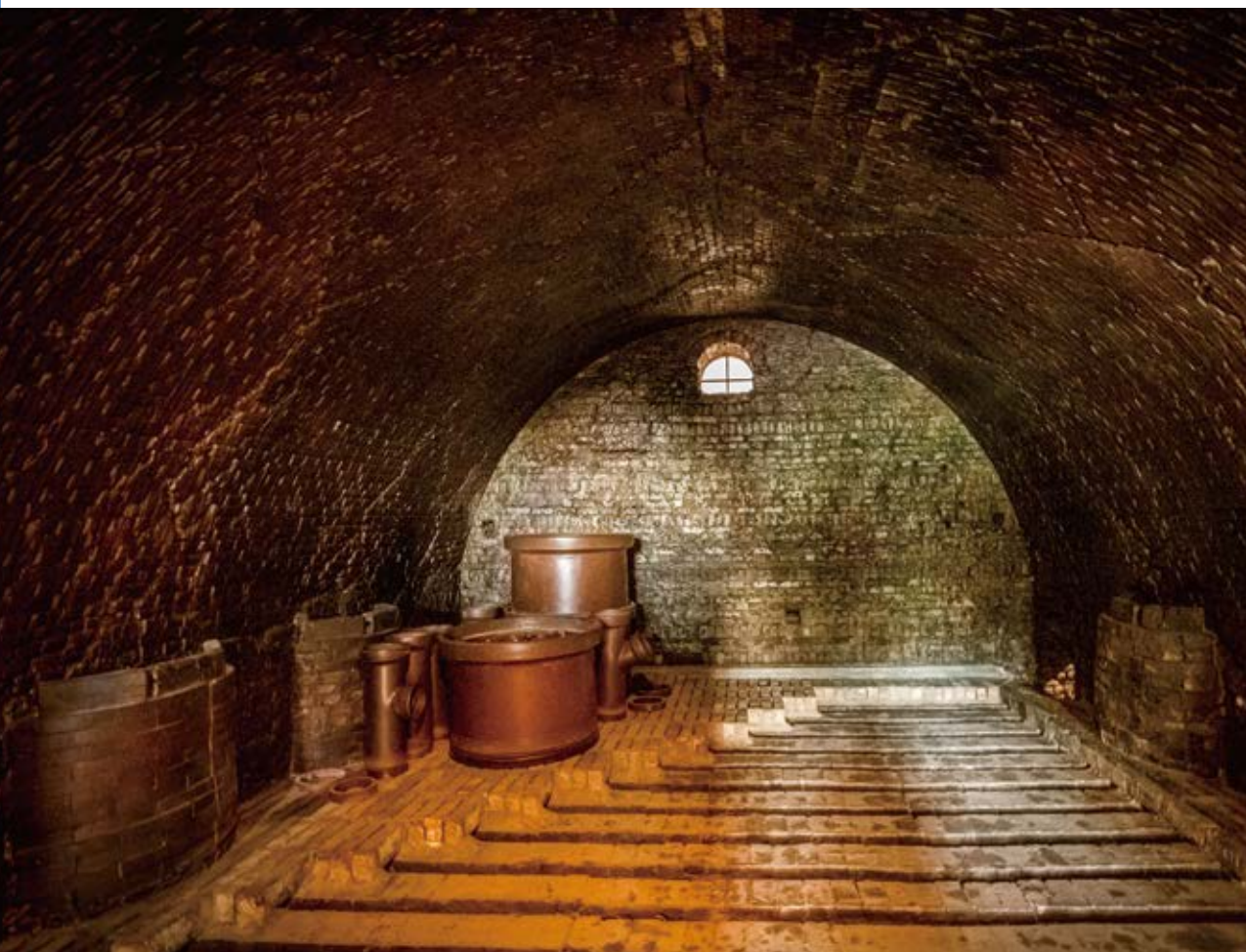
骨太のやきものの産業の姿を伝える「窯」

当時の仕事場そのままに

内寸法で間口 5.5m、奥行11m、高さ 3.4mの煉瓦造。両面焚倒焰式角窯の中では文字通り、両面から焚かれた炎が窯の中央でぶつかって上から下へ逆の炎の流れとなり、すのこ状に敷かれた煉瓦の隙間から床下に吸い込まれていきました。窯内の温度は千度超え。煉瓦が熱で膨らむため、外から廃レールを利用してグイグイと締め付けました。飴色に変色した内部の煉瓦は、食塩釉による造形美です。この窯をいかに保存するかが、大きな問題でした。

ある日突然、火が入られなくなった窯の煉瓦は、中に空気の層を抱いたまま静かに動きを止めました。地盤の粘土層からの湿気が煉瓦を劣化させています。煙突の煉瓦とちがい、取り外して耐震補強をし、またもとに戻すのは不可能でした。さまざまな工法を検討しましたが、「結論は、耐震工事をしない。これは大きな決断でした」と日置さん。

来館者に入っていただく場所は、鉄骨シェルターをつくって安全を確保。それ以外の場所は、できるだけ当時の形に復元して、ダイナミックな窯の仕組みを体感していただく。美しい煉瓦の表面は、劣化を遅延させる薬剤を塗布することで保存していきます。



1. 成形、乾燥させた土管を天井まで積み上げ、天井や壁の開口部を煉瓦と粘土でふさぎ、二人の窯焚きが3昼夜、石炭をくべ続けました。最高温度に近づき、素地が焼締まるタイミングで、海水から作った塩を投入。塩は一瞬にして蒸気になり、ナトリウムは土管の粘土成分と反応して表面にガラスの被膜を作りました。壁の美しい煉瓦は、長年にわたるこうした工程で生まれたものです。

2. 窯入れ風景(撮影:山田脩二)



「建屋」 愛された 常滑の街の風景

1. 建屋に装飾は一切なく、窓の位置も、煙抜きなどの理由があって決まっています。軽快なリズムを刻む木造トラス構造と「窯」の存在感を身近に感じていただくため、乾燥室として使われていた2階の床を一部取り外しました。

合理性を追求した工場建築

工場の建屋は、窯と同じくヨーロッパの技術を取り入れた当時としては先進的な建築でした。木造トラス構造が、大きな窯を包み込む大空間をつくり出しています。

「妻側の梁は木造の限界に近い16m。合理性を追求したスリムな構造です。工場として、非常に効率よく無駄なくしつかりとつくってある」と、日置さん。2003年に耐震補強された建屋でしたが、今回の保全工事では、朽ちた柱も補強、外壁と瓦は新しくしました。

黒板壁と瓦のリニューアル

新しくする外壁は、コールドール独特の風合いを出すために、ウォータージェットでエイジング処理をしたうえで、選び抜いた天然素材で着色、防腐処理を施しました。

土葺きだった瓦は棧葺きに変え、荷重を減らしました。瓦本体は傷みが激しくて再利用できず、新しくすることに。地場のごく普通の素材でしたが、現在のJIS規格の瓦よりも小さいサイズでした。瓦も建屋のプロポーションを決める大きな要素です。同じサイズの瓦を探すことに―。それは淡路島にありました。常滑の町に魅せられ、1967(昭和38)年ごろの町の様子を撮り続けた写真家の山田脩二さん(p.02、p.05参照)が、1980年に淡路島に移住して瓦職人になり、だるま窯で瓦を焼いていたのです。最後の7000枚が残っていたその瓦は、サイズも色合いも探していた瓦とぴったり。まるで何十年か後にこうなる予定だったような、不思議なご縁でした。

今回の保全工事を契機に、INAXライブミュージアムは博物館相当施設に申請し指定されました。近代日本のやきものの産業のあゆみを見ていただける施設として、博物館機能をさらに充実、発信していきます。

Don't miss it!

ココを見て！

The place where the kiln stood
and INAX Museums got their start.
Modern earthenware pipes, liquor jugs, clinker tiles,
and so much more.

Huge volumes of a vast array of products
were born from this great kiln.

When you visit INAX Museums,
head first to the tall chimney of Kiln Plaza.

ここに窯があって、ライブミュージアムが生まれた…。

土管、焼酎瓶、クリンカータイル…

この窯は、どれだけの製品を生み出したことでしょう。

今回の保全工事には、その原点に立ち返り、

来館者にもものづくりの熱を感じてほしいという願いを込めています。

ライブミュージアムを訪れたら、

まず、煙突をめざして「窯のある広場・資料館」にお越しください。

窯がセンター！

「窯のある広場・資料館」に新たに
設ける総合受付では、ミュージア
ムの見どころや楽しみ方を知って
いただきます。6館から
成るライブミュージア
ムの散策に役立つシ
ョートフィルムも上
映します。

Visitor Center

The newly established General
Reception at Kiln Plaza also
serves as Visitor Center. A short
film introducing the six facilities of
INAX Museums will serve as a
guide for your visit.

煙突のひみつ

広場に出たら、ライブミュージアム
のシンボル煙突を見上げよう。

(煙突のStory p.04)

Secret of the Chimney

Come out to the plaza and look up at
the tall chimney, the symbol of INAX
Museums. (See the photo of the
chimney on page 4 and its story on
page 8).

窯の迫力を見よう。

まずは外からじっくり窯を見てくだ
さい。その大きさに圧倒されます。
窯の中に入って煙道や、窯に映し出
される臨場感あふれるプロジェク
ションマッピングをお楽しみください。

(窯のStory p.05)

Enjoy the dynamic kiln

First take a good look at the great kiln
from the outside. Its size is
overwhelming. Then enter the kiln and
enjoy projection mapping on the flue
and kiln. (See photos of the kiln on
page 5 and its story on page 8.)

美しい小屋組みに注目

大正時代の工場建築を味わってくだ
さい。(建屋のStory p.06)

Enjoy the beautiful design of the plant

Enjoy the plant architecture of the
Taisho era (1912-1926). (See photos of
the plant building on page 6 and its
story on page 8.)

みんなにやさしいアプローチ

駐車場から総合受付の「窯のある広場・
資料館」まで、車椅子用スロープを整備
しました。

Wheelchair accessible

A slope for wheelchairs takes visitors from
the parking lot to the general reception.

季節の花も 楽しんでね～

Enjoy the grounds with
their lovely seasonal plants
and flowers.

ライブミュージアムツアーへどうぞ

では、個性豊かなそれぞれの館をお楽しみください。
企画展も開催しています。

Welcome to INAX MUSEUMS!

Visit the other special facilities of our museums and
exhibitions.

Passing on knowledge and the beauty of crafts to future generations



Photo by Shuji Yamada



Kiln Plaza, designated as a registered tangible cultural property (structure) by the Japanese government in 1997, has preserved and opened an earthenware pipe plant built in 1921, which symbolized the prosperity of the town of Tokoname through the 1960s. A project to preserve the plant and keep alive the spirit of the unique craftsmanship of the town through the next century got underway in 2015 and was completed in October 2019.

The kiln that fueled Tokoname's pottery industry

A center for the production of pottery since ancient times, Tokoname started mass production of modern earthenware pipes produced with wooden molds, distilled liquor ("shochu") jugs, and tiles. The town subsequently experienced a long period of rapid growth beginning at the end of the Meiji period (1868-1912).

One of the developments that set this expansion in motion was the formation of a kiln owners trade association and creation of a square down-draft kiln with 14 stoke holes along the both sides modeled on the latest European technology of the time. Unlike conventional kilns built on slopes and fired by wood, this large-scale kiln could be constructed on flat ground and fired by coal. In time, all manufacturers had their own kiln, and this in turn fueled a sharp rise in production and competitiveness. Japan's modernization required an enormous volume of clay pipes, and Tokoname subsequently embarked on a new stage of development in its role as an industrial pottery town. The tall chimneys of the kilns became symbols of modern Tokoname. By the early 1960s nearly 400 chimneys rose high above the landscape.

However, as heavy oil replaced coal and the demand for earthenware pipe declined, the smoke from the chimneys began to disappear. Kiln Plaza was built on the site of Kataoka Masaru Seito Ltd., which shuttered in 1971.

A zone for the culture of pottery

The giant brick rectangular kiln retains its splendor even today. It also conveys the energy of Tokoname as a modern town, with its many workers producing a large volume of goods, and people's passion, ideas, and techniques for the production process. "That's probably why so many people treasure this kiln and wanted to preserve it and how the concept for a museum as the cultural zone for pottery was conceived," says Akemi Onouchi, director of INAX Museums.

The kiln, building, and chimney were restored and opened to the public in 1986 as a project commemorating the company's renaming as INAX Corporation. In 1997, these structures were designated as registered tangible cultural property by the Japanese government, and in 2017 preservation work began on this cultural heritage.

A new start for the museums

The concept guiding the preservation project this time was to display the original kiln and give visitors an understanding of how it worked. Director Onouchi says, "This great kiln, which was the starting point for and the heart of our museums, has been completely restored thanks to this preservation project. This marks a fresh start for the museums into the next era."



The chimney as a symbolic tower Preserving its original appearance 100 years into the future

It was necessary to reinforce the 22-meter-high chimney so that it could resist earthquakes while at the same time changing nothing of the original appearance. The bricks covering the outside of the chimney were removed one by one and stored. Then the foundation and body of the chimney were rebuilt with concrete, and finally, the bricks were returned to their original place.

The great kiln as a window into a thriving industry Leaving the kiln intact

Unlike the bricks for the chimney, it was impossible to remove and put back the bricks in their original form. After much consideration, a decision was made not to make the kiln earthquake-resistant. Instead, steel-framed shelters that could keep people safe in the event of an emergency were built in spots where they would enter. In the remaining places, the kiln was restored to its original form as much as possible so that visitors could experience directly the dynamism of the kiln. The glossy bricks were sealed with a chemical to protect them.



The picturesque plant buildings of Tokoname's townscape Rational plant architecture

The design of the plants, like that of the kiln, also incorporated European technology and was both progressive and functional. The wooden trussed structure created a huge space surrounding the great kiln. For the restoration, the wooden truss was reinforced with steel beams to make it seismic resistant, and the outer walls were rebuilt and the roof tiles replaced.

Renewal of the black board walls and roof tiles

The cedar boards used for the outer walls were treated to give them a weathered appearance, tinted with a natural material, and then treated to make them rot resistant. The roof tiles were in very poor shape and could not be reused.

With this restoration work, INAX Museums have been recognized as "museum-equivalent facilities" under the Museum Act. The Museums shall upgrade its facilities further and continue to provide a place where the public can learn about the history of Japan's modern pottery industry.



「窯のある広場・資料館」リニューアル記念
大「名品」展
—タイル・テラコッタ・古便器・
土管のコレクション

Objet d'art collection
—tiles, architectural terracotta, and assorted
ceramic wares

10.5 Sat.~2020.3.31 Tue.

「土・どろんこ館」「世界のタイル博物館」企画展示室を
中心に館敷地内

INAX ライブミュージアムのコレクションは、「窯のある
広場・資料館」から始まりました。

高い煙突と、大きな窯を内部に抱く黒壁の土管工場は、
常滑のやきものの歴史を物語るシンボルの一つです。「後
世に残したい」との思いから、改修し、整備して1986年
から一般に公開しています。これが私たちのコレクション
第一号となりました。以来、世界各国の装飾タイルや、
建築装飾陶器・テラコッタ、古便器、土管など、人の暮
らしを彩り、あるいは日本の近代的な生活を支えてきた
やきものが集まり、膨大なコレクションを築いています。

近代のものづくりを象徴する文化財である「窯のある
広場・資料館」がリニューアルオープンすることを機に、
これまで展示する機会が少なかった貴重な「名品」を収
蔵庫から出し、一堂に展覧します。数々のコレクション
から垣間見える人々の暮らしや、工夫を凝らしたものづ
くりの心に思いを馳せながら、力強くも繊細なやきもの
魅力をご堪能ください。

We will exhibit the finest tiles, terracotta, old pottery toilets,
and earthenware pipes from INAX Museums collection. This
exhibition is held to celebrate the completion of the preserva-
tion project and reopening of Kiln Plaza, which is a cultural
asset that symbolizes the modern Tokoname pottery industry.



関連イベント

講演会&館内ツアー
私が選ぶ、INAXライブ
ミュージアムの『名品』
Lecture and tour of the exhibition:
"My selection of the very best
from INAX MUSEUMS collection"

11.23 Sat.

講師：森 由美（陶磁研究家）

染付の大皿や鉢を見続けた専門家
は、染付タイルや染付古便器のどこを
見るか。見方、そして「名品」と判断
するポイント、さらには膨大なコレク
ションを前に自分なりの楽しみ方をお
話しいたします。

光るどろだんご
全国大会 2019
2019 National Championship
for making Shiny Clay Balls

11.3.Sun.

中部国際空港セントレア 4階
スカイタウンイベントプラザ

第12回となる光るどろだんご全
国大会。今年は各地方会場におい
て、過去の大会での受賞経験をもと
に「光るどろだんごマイスター」を
認定。全国大会でマイスターたちは
「マイスターチャレンジ」に参加し、
ルールにとらわれず自由に腕を奮い
ます。

大会の入賞作品に加え、上級者で
あるマイスターたちがつくった表現
豊かな光るどろだんごも見どころ。
光るどろだんごの奥深さを発信する
楽しい全国大会になりそうです。



In addition to the championship,
individuals who have earned the title
"Shiny Clay Ball Meisters" will take
part in a separate event called the
"Meister Challenge" in which they are
unrestricted by championship rules.
We can expect to see a wide variety of
beautiful works!

陶楽工房 Tiling Workshop

[予約不要]

「クリスマスリース」 10.19 Sat.~12.24 Tue.
Christmas Wreath

直径10cmのかわいらしいリースをタイ
ル、リボン、ビーズで飾りましょう。
クリスマスイメージした手書きのアート
タイル（別売）もご用意しています。



料 金：1000円/個（税・材料費込）
所要時間：1時間

光るどろだんご Shiny Clay Ball Workshop

[予約制]

秋のテーマ「味覚の秋」 9.1 Sun.~11.30 Sat.
Theme for Autumn: The tastes of autumn

暑い夏が過ぎ、少し涼しくなってくると活
動的になりお腹もすいてきます。収穫の秋、
食欲の秋、おいしい果物もたくさんお店に並
び始めます。秋をイメージした色「蘭茶」と「照
柿」の2色が登場します。おいしそうなん
ごを表現してみませんか。



料 金：900円/個（税込） 「土・どろんこ館」

Report 01

企画展「和製マジョリカタイル—憧れの連鎖」
関連イベント

ワークショップ

つながるタイル —みんなタイルでつながろう—

Workshop:

Tiles for connecting; tiles that connect

3.24 Sun. 世界のタイル博物館 講義室



One of the charms of majolica tiles is the repetition of patterns. Workshop participants made their own original tiles and enjoyed painting the tiles and combining patterns.

マジョリカタイルの魅力の一つは「柄の連鎖」。今回は、一人が4枚のタイルに絵を描いてオリジナルのタイルを制作し、絵付けと柄の組み合わせの面白さを体験しました。4枚のタイルの柄がつながるためには、一つだけ決まりがあります。それが何か、写真を見ておわかりでしょうか？最後に参加者全員のタイルを並べ、柄がつながる楽しさを共有しました。

Report 02

企画展「水を見る—秘めたるかたちと無限のちから」
Exhibition: Seeing Water—Surprising Shapes, Unlimited Power

4.26 Fri.-9.24 Tue. 土・どろんこ館 企画展示室

ふとした瞬間に見せる水の「かたち」と「ちから」に焦点をあて、その姿の成り立ちを、展示と体験で紹介した企画展。展示装置を自分で動かして、波が連続する様子を見たり、渦巻きをつくったり。さまざまにかたちを変える水の様子を目の当たりにすると、身近な水のちからと不思議さをあらためて感じられると、夏休みに訪れた親子連れにも好評でした。

The exhibit conveyed the shape and power of water in special, unplanned moments in time. The exhibition was praised by visitors, who gained a new awareness and appreciation of the wonders of an element that is an integral part of our lives.



関連イベント

土と水の遊園地

Mud and Water Amusement Park

5.3 Fri.-5.5 Sun. 土・どろんこ館前 どろんこ広場



The children made mud balls. After creating mounds of mud, which they called "mud monsters," they conquered them by collectively squirting water from water guns. They had a great time playing with the mud and water.

子どもたちが思いっきり土と水に触れあえる遊び場が、どろんこ広場に出現しました。どろだんごをつくったり、水鉄砲を一齐に浴びせて、土の塊「土怪人」を崩したり。土と水のアトラクションに子どもたちは大はしゃぎ。子どもたちは遊びの中で、土の力、水の力を体感しました。

MUSEUM SHOP

ミュージアムショップ



鍋敷きとタイルコースター
Tile pot stands and coasters

トルコタイルに用いられる伝統的な植物模様がデザインされた、花形の鍋敷きとタイルコースターです。どちらも裏面はコルクシートが施されているので、テーブルを傷つけずご使用いただけます。

花形鍋敷き：2,800円(税別)

タイルコースター：1,400円(税別)

ミュージアムショップの商品を
オンラインサイトにてご購入
いただけるようになりました。



<https://www.care-goods.lxil-online.com/house/ilm/>

素材の持ち味を活かした料理を提供する
Cuisine that captures the full flavor
of the ingredients

pizzeria
la fornace
ピッツェリア ラ・フォルナーチェ



- ピッツァ/クワトロフォンギ
- パスタ/秋鮭ときのこのアンチョビバターソース

チーズベースの生地に4種のキノコをのせた、あっさりシンプルなピッツァ。松の実でアクセントをつけ、バターでコクと風味を出したオリジナルパスタ。いずれも秋を楽しむ一皿です。

Lunch time: 11:00-14:30 L.O.
Café time: 10:00-11:00, 14:30-17:15 L.O.
Dinner time: 土・日・祝日 17:30-20:00 L.O.
水曜日休(祝日は営業) TEL0569-34-8266

関連イベント

講演会 百変化する水

Lecture: Water and the myriad forms it takes

7.13 Sat.

世界のタイル博物館 講義室

講師：小塩哲朗（名古屋市科学館学芸員）

「噴水の水はなぜいろんなかたちで飛び出すの？」「水と氷と水蒸気はどうちがうの？」さまざまな形を変える水の性質について、わかりやすく解説する小塩さん。水を満たしたコップに一元玉を一枚ずつ沈めていく実験は、表面張力を学ぶもの。会場の子どもたちが積極的に参加して大いに盛り上がりました。

Tetsuro Ojio, curator at Nagoya City Science Museum, gave entertaining explanations of the wonders of water as it changes from a liquid to gas to solid. Children and adults participated in experiments and had an exciting science lesson.

関連ワークショップ

北斎の波と遊ぼう！

アニメーションワークショップ

Workshop:

Let's play with Artist Hokusai's Great Wave Animation workshop

7.24 Wed. 土・どろんこ館

講師：蓮沼昌宏（美術家）



参加者の前に用意されたのは葛飾北斎の有名な波の絵。それをベースに色を塗り、次に魚やカッパなど絵の中に登場させるキャラクターを自由につくって、波とどう遊ぶかを考えます。どこから登場させよう動かし10シーンを考えたら駒撮り撮影へ。「短いなかに、想像力が掻き立てられるストーリーがあって、どれも楽しい作品」と蓮沼さん。鑑賞会では、展示会場内の壁一面に、各自がつくった5秒のアニメーションが映し出され、見学者を楽しませました。



Participants tried their hand at creating a five-second animated short with Hokusai Katsushika's famous Great Wave print. They enjoyed watching their animated shorts projected on the wall of the exhibition hall.

Report 03

どろの遊園地2019

—子どもは遊びの天才だ！

2019 Mud Amusement Park

—Children are geniuses at play!

8.17 Sat. / 18 Sun.

土・どろんこ館前 どろんこ広場

窯のある広場 休憩所

夏休み、大人気のワークショップですが、中には初めて触れるどろの感触に戸惑う子も。そこで今年のテーマは「親子で土を楽しもう！」。おとな用の「足どろ」も用意し、親子で土とふれあい、その楽しさを子どもたちと分かちあっていただきました。新企画として京都造形芸術大学の先生・学生たちと造形遊びを楽しむ「Terra小屋(てらこや)」も開設。どろ遊びを終えた子や当日来館した子が続々と訪れました。



Cool clay in a field of mud feels so good. "Works of mud art" can be made on the palms of a hand or cheek. Children had great fun playing with mud with students from the Kyoto University of Art and Design and other volunteers.

Report 04

「れんがDEどーもくん！計画」
ワークショップ

Workshop related to an NHK drama

8.21 Wed. 陶楽工房

主催：NHK名古屋放送局

NHK BS 愛知発地域ドラマ「黄色い煉瓦〜フランク・ロイド・ライトを騙した男〜」イベントとして、タイル粘土に鉄筆でスクラッチして絵を描くワークショップが行われました。作品は、焼成して、NHKのキャラクター「どーもくん」の像に組み立て巡回展示予定です。ドラマは、フランク・ロイド・ライトが設計した帝国ホテル旧本館に必要な黄色い煉瓦（スクラッチタイル）製作を依頼された常滑の建築陶器職人 久田吉之助を描いており、当館でロケも行われました。〈放送 NHK BSプレミアム 11月27日(水) 22:00～22:59 (全1回)〉



The drama features the craftsmen of Tokoname who made the "Yellow Scratch-Faced Bricks" that adorned the old main building of the Imperial Hotel in Tokyo.

【表紙写真】

1.企画展「水を見る一秘めたるかたちと無限のちから」 2.関連ワークショップ「北斎の波と遊ぼう！アニメーションワークショップ」 3.フランク・ロイド・ライト設計「帝国ホテル旧本館」食堂の柱（建築陶器のはじまり館）

museum collection

ミュージアムコレクション

50



愛宕下遺跡出土の常滑産素焼土管

Unglazed earthenware pipes made in Tokoname from the ruins at Atagoshita, Tokyo

愛宕下遺跡（東京都）と呼ばれる、環状第二号線の埋蔵文化財発掘調査で出土した土管です。遺跡からは江戸時代以降の武家屋敷跡や石垣、排水施設、上水施設などの遺構、陶磁器や木製品などの遺物が出土しています。

土管は7世紀、瓦の技術とともに日本に伝わりますが、16世紀まで石組みや木樋の導管が主流でした。時代ごとに土管の形状は変わり、接続部にソケットが付いた形は室町後期からつくられるようになります。

本品は、ソケットの形や管の歪み、無釉の表面などから、紐状粘土を円筒状に積み上げた常滑産の素焼土管で、江戸時代末から明治時代初めにつくられたと考えられます。木型による土管成形法が常滑で明治5年に開発された後、同地は近代土管の一大産地となります。

Earthenware pipes have been excavated from the ruins at Atagoshita, Tokyo, where samurai residences and water treatment facilities stood during and after the Edo era (1603–1868). From their socket shape and depressions, they appear to be earthenware pipes made by winding ropes of clay into cylindrical shapes and are believed to have been produced in Tokoname from the second half of the nineteenth century.



発掘の様子
(写真提供=東京都教育委員会)

資料名:「愛宕下遺跡出土の常滑産素焼土管」

●サイズ(内径×長さmm):左から73×635、75×630、75×610 ●製作地:愛知県常滑 ●年代:江戸末期～明治初期
●出土場所:東京都港区(新橋・虎ノ門地区) ●資料提供:東京都埋蔵文化財センター



INAX ライブミュージアム

〒479-8586

愛知県常滑市奥栄町1-130

TEL.0569-34-8282 FAX.0569-34-8283

<https://www.livingculture.lxil/ilm/>

開館時間——10:00am～5:00pm(入館は4:30pmまで)

休館日——水曜日(祝日の場合は開館)、年末年始

共通入館料——一般:700円、高・大学生:500円

小・中学生:250円(税込、各種割引あり)

*10月5日改訂価格

交通——<バス>

●名鉄線「常滑駅」または中部国際空港より
知多バス「知多半田駅」行き

「INAXライブミュージアム前」下車徒歩2分

<お車>

●名鉄線「常滑駅」より約6分

●中部国際空港より約10分

(セントレアライン「りんくうIC」降りる)

●知多半島道路「半田IC」より約15分

●セントレアライン「常滑IC」より約7分

(乗用車・バス駐車場完備)

INAX MUSEUMS

1-130 Okuei-cho, Tokoname-shi,

Aichi Prefecture 479-8586 Japan

<https://www.livingculture.lxil/en/ilm>

Hours:

Open (Museum & Shop): 10:00-17:00

(Last entry:16:30)

Closed: Wednesdays (Open if the Wednesday is a public holiday), New Year holidays

Admission Fee (tax inc.):

Adults ¥700

High school and college students ¥500

Elementary and junior high school students ¥250

Access

By Bus:

From Meitetsu Tokoname Station or Centrair Central Japan International Airport, take Chita Bus bound for "Chita Handa Station". Get off at "INAX Live Museum-mae". Two-minute walk from bus stop.



LIVING
CULTURE